

臨床看護師による学会発表演題名の傾向分析

— テキストマイニングの手法を用いて —

山村 文子¹⁾ 森 舞子¹⁾ 太尾 元美²⁾ 新居 学³⁾
井上 知美¹⁾ 内布 敦子¹⁾ 坂下 玲子⁴⁾

要 旨

【目的】

本研究の目的は、臨床施設と大学が連携した看護研究支援システム構築への第一歩として、臨床看護師がどのようなテーマに関心を持ち看護研究を行っているかを明らかにすることである。

【研究方法】

日本看護系学会協議会の会員学会名簿より、特定の大学や病院が運営しているため入会制限のある学会を除き、学会会員数が1,000名以上である20学会が、2012年に発行した学術集会抄録集を分析の対象とした。対象より臨床看護師が筆頭研究者である発表演題を抽出し、KH Coderを用いて発表演題名のテキストマイニング分析を行った。

【結果】

対象4,289演題のうち臨床看護師が筆頭研究者である発表演題は、1,947件（45.4%）であり、その内の68.5%が研究者が臨床看護師のみの発表演題であった。テキストマイニングを用いた分析より、頻出語上位は、『患者』、『看護師』、『看護』であった。さらに、『患者』の共起語として＜受ける＞＜家族＞＜検討＞＜化学療法＞＜支援＞、『看護師』の共起語として＜要因＞＜新人＞＜影響＞＜手術室＞＜認識＞、『看護』の共起語として＜患者＞＜家族＞＜終末期＞＜がん患者＞＜外来＞が抽出された。研究者が臨床看護師のみの発表演題と、大学教員が含まれる発表演題とで頻出語を比較すると、前者では『検討』『取り組み』『効果』などの言葉が、後者では『要因』『支援』『影響』などの言葉が上位を占めた。

【考察】

臨床看護師は、数多くの看護研究を行い学会で発表していたが、先行研究によれば論文に至るものは少ない。臨床看護師は、患者家族、化学療法患者、新人看護師、手術室看護師、がん看護、終末期看護、外来看護に関するテーマで数多くの看護研究を行っていることが推測された。その内容は、日々の看護援助の取り組みの報告や直面している課題に対してであることが推察された。今後、臨床看護研究に大学が携わることでEvidenceの構築と看護の質の向上へと繋がる可能性が示唆された。

キーワード：臨床看護師、発表演題名、テキストマイニング、頻出語、共起語

-
- 1) 兵庫県立大学看護学部 実践基礎看護講座
 - 2) 元兵庫県立大学
 - 3) 兵庫県立大学工学部 電子情報電気工学科
 - 4) 兵庫県立大学看護学部 看護基礎講座

I. はじめに

看護研究は看護実践に影響を与える既存の知を検証し、またそのような知を創造する科学的なプロセスと定義されている¹⁾。このことから、看護の質を向上するためにはEvidence-Based Practiceの推進と臨床でのエビデンスを生む研究の実施は不可欠であると考えられる。

現在、100床以上の規模の病院では、かなり高い割合で看護研究が実施されていると推定される²⁾。北島らが兵庫県のデータを基に全国に適応して計算したところ、全国で8,500以上ある病院・病棟の多くが看護研究に取り組んでいると考えられ、少なく見積もっても毎年全国で2万以上の看護研究が実施されていると想定される³⁾。

しかしその一方で、それらの看護研究が必ずしもエビデンスの構築に寄与していない実態があり、臨床での研究が看護の質向上のための知識の構築に十分な効果をあげていないと示唆されている⁴⁾。学術学会誌に掲載された論文の検討によると、「臨床看護師が第一筆頭者である論文」は5年間で210編（全体の13.6%）に留まり、また、原著論文は少なく、その多くは研究報告や実践報告であったことが示されている⁵⁾。加えて、事例研究においては、Research Questionが不明なものが多いことや、量的研究では、標本集団の設定方法や収集する変数の説明が不明瞭で信頼性および妥当性に欠けることも指摘されている⁶⁾。これらの理由としては、臨床看護師が取り組むのに適した研究デザインが確立されていないこと、臨床では十分な支援・教育体制が整っていないことが挙げられている⁷⁾。

兵庫県下の病院における看護研究支援の実態を調べた研究では、看護研究を推進する上でアンケート回答者の60%以上が「不足している」とした項目は「研究を指導できる病院スタッフ」「研究法に関する知識」「データ分析に関する知識・技術」「研究への意欲」「研究時間」「研究計画書・論文作成の知識・技術」であった⁸⁾。病院では研究の指導者は看護師長や副看護師長等の上司が最も多く、他に職場の先輩・同僚、看護部の教育担当者などが挙げられている⁹⁾。研究を実施していく上で必要となってくる研究方法、データ分析、論文作成に関する知識や技術は、臨床看護師や職場の先輩、上司には

必ずしも備わっていないであろうことを考慮すると、その部分は大学が支援できるのではないかと考える。今後、臨床と大学が有機的に連携して研究を進め、その成果を学会発表し、学術雑誌への論文投稿をすることによって、看護のエビデンスを構築することが必要だと考えられる。

そこで筆者らは、臨床施設と大学が連携した看護研究支援システムを構築していくための第一歩として、臨床看護師が行う看護研究の実態と、どのようなテーマに関心を持ちながら看護研究を行っているのかを明らかにし、大学の連携の在り方を探る一資料とすることを目的に、2012年に発表された看護研究の演題名の分析を行った。

II. 研究方法

1. 対象

日本看護系学会協議会の会員学会名簿に登録されている学会のうち、特定の大学や病院が運営しているために入会の制限のある学会を除き、2012年10月時点で学会会員数が1,000名以上である学会が発行する学術集会抄録集を対象とした。学会会員数は、最新の学会誌または学会ホームページに記載されている学会会員数を用いたが、記載されていない学会については学会事務局へ問い合わせを行い把握した。また臨床看護師が中心となり取り組んでいる看護研究の発表演題名を集計するために、発表時の所属が臨床機関であっても、修士論文・博士論文と記載のあるものは除外した。

2. データ収集・分析方法

対象抄録集より、第一筆頭者の所属が病院であること、および看護部または看護師と記載されている演題名を抽出した。（以下「臨床看護師が第一筆頭者である発表演題」と示す。）次に、それらの演題名を「病院所属者のみで行われている発表演題」と「教育研究機関の共同研究者がいる発表演題」に分類したものをデータとし、テキストマイニングによる分析を行った。テキストマイニングとは、テキストデータを解析し情報を抽出する手法の一つである¹⁰⁾。今回は、樋口らが開発したテキストマイニングのソフトウェアである「KH Coder」を用いて分析を行った。「KH Coder」は、新聞記事、質問紙

調査における自由回答項目、インタビュー記録等、社会調査によって得られる様々なテキスト型データを計量的に分析するために製作されたものである¹¹⁾。このソフトウェアを用いることにより計量的な分析と原文解釈とを循環的に行き来しながら分析を深めることができる¹²⁾。

分析は以下の手順で実施した。

- 1) 語解析を行い、分析対象となる発表演題名を単語の単位に区切り、各単語の品詞を判別した。
- 2) 対象全演題名において単語頻度分析で出現回数を分析し、出現度の高い単語についてはそれぞれ共起語を抽出した。共起語とは、ある単語がある文章中に出た時、その文章中に別の限られた単語が頻繁に出現する

こと、またその言葉の意である。

- 3) 対象全演題名を「病院所属者のみで行われている発表演題（以下“スタイル1”と示す）」と「教育研究機関の共同研究者がいる発表演題（以下“スタイル2”と示す）」に分類し、単語頻度分析で出現回数を分析した。それぞれの演題名で出現度の高い単語については共起語を抽出し比較を行った。

Ⅲ. 結 果

1. 学会別発表演題数の内訳

対象とした20学会において2012年の1年間で発表された演題総数は、4,289件であった（表1）。そのうち「臨

表1 学会別発表演題数

学 会 名	会 員 数	発表演題 総 数	臨床看護師が 第一筆頭者である 発表演題数 (%)	病院所属者のみで 行われている 発表演題数 (%) ¹⁾	教育研究機関の 共同研究者がいる 発表演題数 (%) ²⁾
日本看護科学学会	6,659	803	130 (16.2)	30 (3.7)	100 (12.5)
日本看護研究学会	6,343	473	109 (23.0)	19 (4.0)	90 (19.0)
日本手術看護学会	4,673	174	166 (95.4)	162 (93.1)	4 (2.2)
日本がん看護学会	4,307	511	367 (71.8)	258 (50.5)	109 (21.3)
日本看護学教育学会	3,958	282	25 (8.9)	12 (4.3)	13 (4.6)
日本腎不全看護学会	3,850	162	154 (95.1)	143 (88.3)	11 (6.8)
日本救急看護学会	3,016	156	140 (89.7)	121 (77.6)	19 (12.2)
日本糖尿病教育・看護学会	2,300	191	151 (78.5)	125 (64.9)	26 (13.6)
日本小児看護学会	1,880	137	58 (42.3)	35 (25.5)	23 (16.8)
日本助産学会	1,800	178	42 (23.6)	22 (12.4)	20 (11.2)
日本創傷・オストミー・失禁管理学会	1,800	126	101 (80.2)	84 (66.7)	17 (13.5)
日本看護管理学会	1,695	280	144 (51.4)	76 (27.1)	68 (24.3)
日本看護技術学会	1,501	85	13 (15.3)	2 (2.4)	11 (12.9)
日本クリティカルケア看護学会	1,500	80	60 (75.0)	43 (53.8)	17 (21.3)
日本家族看護学会	1,450	92	33 (35.9)	18 (19.6)	15 (16.3)
日本看護診断学会	1,320	35	23 (65.7)	20 (57.1)	3 (8.6)
日本災害看護学会	1,300	149	75 (50.3)	59 (39.6)	16 (10.7)
日本循環器看護学会	1,250	107	92 (86.0)	83 (77.6)	9 (8.4)
日本老年看護学会	1,223	189	40 (21.2)	9 (4.8)	31 (16.4)
日本精神保健看護学会	1,000	79	24 (30.4)	12 (15.2)	12 (15.2)
合 計	52,825	4,289	1,947	1,333	614

会員数は2012年10月時点

1) 本文中では「スタイル1」と示す。

2) 本文中では「スタイル2」と示す。

床看護師が第一筆頭者である発表演題」は1,947件で、全体の45.4%であった。その内訳は、1,333件（68.5%）が「病院所属者のみで行われている発表演題（以下、スタイル1）」であり、614件（31.5%）が「教育研究機関の共同研究者がいる発表演題（以下、スタイル2）」であった。学会別に、「臨床看護師が第一筆頭者である発表演題」の割合をみると、日本手術看護学会（95.4%）、日本腎不全看護学会（95.1%）、日本救急看護学会（89.7%）、日本循環器看護学会（86.0%）、日本創傷・オストミー・失禁管理学会（80.2%）、日本糖尿病教育・看護学会（78.5%）、日本クリティカルケア看護学会（75.0%）、日本がん看護学会（71.8%）、日本看護診断学会（65.7%）、日本看護管理学会（51.4%）の順に多かった。

また、学会別発表演題総数に対するスタイル1の割合は、日本手術看護学会（93.1%）、日本腎不全看護学会（88.3%）、日本救急看護学会（77.6%）、日本循環器看護学会（77.6%）、日本創傷・オストミー・失禁管理学会（66.7%）、日本糖尿病教育・看護学会（64.9%）、日本看護診断学会（57.1%）、日本クリティカルケア看護

学会（53.8%）、日本がん看護学会（50.5%）、日本災害看護学会（39.6%）の順に多かった。

学会別発表演題総数に対するスタイル2の割合は、日本看護管理学会（24.3%）、日本がん看護学会（21.3%）、日本クリティカルケア看護学会（21.3%）、日本看護研究学会（19.0%）、日本小児看護学会（16.8%）、日本老年看護学会（16.4%）、日本家族看護学会（16.3%）、日本精神保健看護学会（15.2%）、日本糖尿病教育・看護学会（13.6%）、日本創傷・オストミー・失禁管理学会（13.5%）の順に多かった。

2. テキストマイニングを用いた学会発表演題名の分析結果

1) 演題名の頻出語抽出

対象全演題名の中から出現回数の多い上位50語を抽出した（表2）。これらのうち、『患者』（447回）、『看護師』（371回）、『看護』（271回）という3語の出現度が特に高く、次いで『検討』『支援』『効果』『家族』『がん患者』『取り組み』『受ける』の順であった。

表2 発表演題名 頻出語上位50件

順位	抽出語	出現回数	順位	抽出語	出現回数	順位	抽出語	出現回数
1	患者	447	18	影響	82	35	手術室	55
2	看護師	371	19	化学療法	81	36	継続	54
3	看護	271	20	評価	79	37	活動	53
4	検討	162	21	ケア	77	37	関連	53
5	支援	137	21	教育	77	37	分析	53
6	効果	131	23	研修	72	40	医療	52
7	家族	127	23	体験	72	40	経験	52
8	がん患者	113	23	病院	72	40	高齢者	52
9	取り組み	108	26	現状	71	40	自己	52
10	受ける	107	26	終末期	71	40	実践	52
11	外来	106	28	糖尿病	69	45	向ける	51
12	要因	103	29	困難	68	45	変化	51
13	課題	96	30	指導	67	47	糖尿病患者	50
14	手術	92	31	治療	61	47	皮膚	50
15	導入	88	32	認識	60	49	予防	49
16	管理	83	33	行動	56	49	療法	49
16	病棟	83	33	調査	56			

表3 『患者』『看護師』『看護』共起語の比較

順位	患 者				看 護 師				看 護			
	抽出語	全体 ⁽¹⁾	共起 ⁽²⁾	Jaccard ⁽³⁾	抽出語	全体	共起	Jaccard	抽出語	全体	共起	Jaccard
1	受ける	107(0.055)	65(0.147)	0.1343	要因	101(0.052)	40(0.094)	0.0825	患者	442(0.227)	134(0.262)	0.1636
2	家族	116(0.060)	48(0.109)	0.0941	新人	34(0.017)	32(0.075)	0.0751	家族	116(0.060)	40(0.078)	0.0681
3	検討	161(0.083)	41(0.093)	0.073	影響	82(0.042)	35(0.083)	0.0743	終末期	71(0.036)	35(0.068)	0.064
4	化学療法	80(0.041)	35(0.079)	0.0719	手術室	55(0.028)	32(0.075)	0.0716	がん患者	113(0.058)	37(0.072)	0.063
5	支援	132(0.068)	37(0.084)	0.0689	認識	60(0.031)	32(0.075)	0.0708	外来	104(0.053)	32(0.063)	0.0549
6	外来	104(0.053)	33(0.075)	0.0643	病棟	82(0.042)	33(0.078)	0.0698	退院	46(0.024)	26(0.051)	0.049
7	治療	59(0.030)	28(0.063)	0.0592	支援	132(0.068)	33(0.078)	0.0631	困難	68(0.035)	25(0.049)	0.0451
8	困難	68(0.035)	26(0.059)	0.0537	病院	72(0.037)	29(0.068)	0.0621	高齢者	51(0.026)	22(0.043)	0.0407
9	終末期	71(0.036)	25(0.057)	0.0512	勤務	34(0.017)	26(0.061)	0.0602	意思決定	32(0.016)	21(0.041)	0.0402
10	術後	41(0.021)	23(0.052)	0.05	研修	61(0.031)	26(0.061)	0.0566	研修	61(0.031)	20(0.039)	0.0362

- (1) 全体：分析対象ファイル内でその語がいくつの文書に出現したのかという度数と、その語が文書中に出現する確率（前提確立）
- (2) 共起：指定した条件に当てはまる文書の中でその語がいくつの文書に出現したのかという度数と、その語が文書中に出現する確率（条件付き確立）
- (3) Jaccard係数：共起の強さを示す指標。この測度値は0から1までの値を取り、2つのコードについて同じ文書中に同時に出現する（共起する）と関連が強いと見なし、その値は1に近づく。

2) 『患者』『看護師』『看護』の共起語

対象演題名中の頻出度合いが高い『患者』『看護師』『看護』それぞれ3語について共起語を抽出した（表3）。『患者』の共起語としては、＜受ける＞＜家族＞＜検討＞＜化学療法＞＜支援＞＜外来＞＜治療＞＜困難＞＜終末期＞＜術後＞が、『看護師』の共起語としては、＜要因＞＜新人＞＜影響＞＜手術室＞＜認識＞＜病棟＞＜支援＞＜病院＞＜勤務＞＜研修＞が、『看護』の共起語としては、＜患者＞＜家族＞＜終末期＞＜がん患者＞＜外来＞＜退院＞＜困難＞＜高齢者＞＜意思決定＞＜研修＞が、上位に挙げられた。

3) スタイル1と2における演題名頻出語の比較

スタイル1、2ともに上位には『患者』『看護師』『看護』が共通して並んだ（表4）。スタイル1の頻出語上位10位は『患者』『看護師』『看護』『検討』『取り組み』『効果』『課題』『支援』『手術』『外来』の順であった。スタイル2の頻出語上位10位は『看護師』『患者』『看護』『がん患者』『要因』『支援』『家族』『影響』『検討』『体験』の順であった。上位20位以内でスタイル1・2とも

に現れている頻出語は『検討』『効果』『家族』『受ける』『化学療法』であった。

4) スタイル1と2における『検討』の比較

3)より、スタイル1と2の両者にみられ、その内で出現頻度の高い『検討』という用語に着目してスタイル1と2を比較した（表5）。スタイル毎に頻出頻度の高い用語の共起語を比較することで、それぞれの研究対象の傾向の違いが見られた。スタイル1では『検討』と＜手術＞＜教育＞＜新人＞＜方法＞＜指導＞＜要因＞＜病棟＞＜ケア＞＜外来＞＜病院＞が順に高一度合いで共起されていた。スタイル2では＜要因＞＜影響＞＜患者＞＜ケア＞＜評価＞＜効果＞＜看護＞＜学習＞＜術後＞＜看護職＞が順に高一度合いで共起されていることが明らかとなった。

表4 演題名頻出語の比較

	病院所属者のみで行われている発表演題		教育研究機関の共同研究者がいる発表演題	
	抽出語	出現回数(回)	抽出語	出現回数(回)
1	患者	330	看護師	144
2	看護師	227	患者	117
3	看護	170	看護	101
4	検討	118	<u>がん患者</u>	72
5	<u>取り組み</u>	99	<u>要因</u>	58
6	効果	95	支援	54
7	<u>課題</u>	86	家族	53
8	支援	83	<u>影響</u>	47
9	<u>手術</u>	82	検討	44
10	<u>外来</u>	81	<u>体験</u>	44
11	導入	78	受ける	43
12	家族	74	関連	39
13	管理	68	効果	36
14	受ける	64	困難	33
15	教育	62	高齢者	32
16	評価	59	終末期	31
17	ケア	58	行動	28
18	糖尿病	56	認識	28
19	化学療法	55	病棟	28
20	研修	55	化学療法	26

太字：上位10位内に挙げた単語の中で、もう一方の上位20位内に挙がっていない単語

表5 『検討』の共起語 上位10件

	病院所属者のみで行われている発表演題				教育研究機関の共同研究者がいる発表演題			
	抽出語	全体	共起	Jaccard	抽出語	全体	共起	Jaccard
1	手術	127(0.095)	17(0.144)	0.0746	要因	56(0.092)	9(0.209)	0.1
2	教育	69(0.052)	11(0.093)	0.0625	影響	47(0.077)	7(0.163)	0.0843
3	新人	29(0.022)	8(0.068)	0.0576	患者	115(0.188)	11(0.256)	0.0748
4	方法	30(0.022)	8(0.068)	0.0571	ケア	19(0.031)	4(0.093)	0.069
5	指導	72(0.054)	10(0.085)	0.0556	評価	20(0.033)	4(0.093)	0.0678
6	要因	45(0.034)	8(0.068)	0.0516	効果	36(0.059)	5(0.116)	0.0676
7	病棟	67(0.050)	9(0.076)	0.0511	看護	91(0.149)	8(0.186)	0.0635
8	ケア	110(0.082)	11(0.093)	0.0507	学習	10(0.016)	3(0.070)	0.06
9	外来	102(0.076)	10(0.085)	0.0476	術後	13(0.021)	3(0.070)	0.0566
10	病院	60(0.045)	8(0.068)	0.0471	看護職	17(0.028)	3(0.070)	0.0526

Ⅳ. 考 察

1. 臨床看護師による発表の傾向

「臨床看護師が第一筆頭者である発表演題」は、発表演題全体の45.4%を占めていた。学会によって、8.9%から95.4%と差があるが、20学会中12学会は半数を超えており、多くの臨床看護師が研究を行い学会で研究結果を発表していることが明らかになった。さらに、「臨床看護師が第一筆頭者である発表演題」のうち「病院所属者のみで行われている発表演題」は68.5%を占めていた。学会によっては、「病院所属者のみで行われている発表演題」が7割以上を占める学会があった。特に、日本手術看護学会（93.1%）、日本腎不全看護学会（88.3%）、日本救急看護学会（77.6%）、日本循環器看護学会（77.6%）でその割合が高かった。このことより、臨床看護師が中心となって活動していると考えられる学会も多いことがわかった。

一方、掲載論文を検討した先行研究では、臨床看護職が第一著者である論文は全体の15%にも満たず、さらに臨床看護職が第一著者である論文は絶対数においても割合においても減少していることが報告されている¹³⁾。学会で研究結果を発表することは、速やかに伝達する方法としては重要であるが、多くの情報は記録物として残らず社会全体に対するその影響力は限られる。一方、論文で研究結果を出版する場合は、永続的に雑誌や書籍に記録が残り、多くの人々に有用な情報が伝達できるとされている¹⁴⁾。今回の結果より、多くの臨床看護師が看護研究を行い学会で発表していることが明らかになった。しかし、それらの研究が論文に至る可能性は非常に少ないと推測される。臨床で実施されている看護研究の結果を、看護の質を向上させるエビデンスの構築につなげていくには、臨床看護師が行った研究を学会発表のみに留めず、学術雑誌へ掲載できるものへとしていくことが必要だと考えられた。

2. 臨床看護師が関心を持っている研究テーマ

研究結果より、臨床看護師は、『患者』『看護師』『看護』のテーマで数多くの研究を行っていることがわかった。さらに、『患者』の共起語としては、＜受ける＞＜家族＞＜検討＞＜化学療法＞＜支援＞が上位を占め

た。『看護師』の共起語としては、＜要因＞＜新人＞＜影響＞＜手術室＞＜認識＞が上位を占めた。『看護』の共起語としては、＜患者＞＜家族＞＜終末期＞＜がん患者＞＜外来＞が上位を占めた。これらより、臨床看護師は、患者家族、化学療法患者、新人看護師、手術室看護師、さらに、がん看護、終末期看護、外来看護に関するテーマに関して数多くの看護研究を行っていることが示された。

患者家族に関する演題が多かった理由として、近年、がん看護やクリティカル看護など様々な臨床分野で患者家族へのケアの必要性が高まってきているからだと推察される。その背景には、急速な少子高齢化や若者の晩婚化および未婚化によって、核家族化や高齢者世帯の増加、一人暮らし世帯の増加など、患者家族を取り巻く環境の変化¹⁵⁾があると考えられる。そのことが、退院調整や日々のケアなど、臨床看護師の看護援助に大きく影響を及ぼしていると考えられる。また、家族看護論は1990年代から日本に導入されはじめた比較的新しい看護分野であるが、その発展とともに、家族看護の重要性に関する意識が高まってきたことも^{16), 17)}、要因として考えられる。

＜新人＞看護師についての演題も多かった。その背景として、急速な少子高齢化の影響で将来の深刻な看護師不足が懸念されることや、医療の高度化や平均在院日数の短縮化、医療安全に対する患者意識の高まりにより臨床現場では高い実践能力が必要とされていることなどが挙げられる。また、看護師不足の一方で、臨床現場で必要とされる臨床実践能力と看護基礎教育で修得する看護実践能力とのギャップにより、新人看護師が離職に追い込まれている現状がみられる。その改善策として、2009年7月に、保健師助産師看護師法等の一部改正する法律が制定され、2010年4月1日から、新たに業務に従事する看護職員の臨床研修その他の研修が努力義務とされた^{18), 19)}。このような新人看護師を取り巻く現状が、臨床現場での課題となり、看護研究へとつながっていたと考えられる。

手術室看護のテーマが多かったのは手術看護分野の臨床看護師の会員の多さも反映していると考えられる。また、2010年度の診療報酬改正により手術技術料がアップしたことに伴い、急性期病院では手術件数の増加が余儀

なくされた。手術医療の高度化・複雑化もめざましく、その中で他の看護分野とは異なる知識・技術体系の手術看護分野にどのように興味を持ちキャリア開発をしていくのか、そのプログラムを検討していくことは今後の大きな課題とされる。また、手術室の医師や看護師不足が懸念される中、今以上にチーム医療の一員として他職種と連携していくこと、また、看護師の業務拡大が望まれていることも大きな要因といえよう^{20), 21)}。

がん看護については、1996年よりがん看護専門看護師の認定が開始され、2013年7月現在その数は435人となる。1999年に緩和ケア認定看護師とがん性疼痛看護認定看護師の認定が開始され、その後も、がん化学療法看護認定看護師、乳がん看護認定看護師、がん放射線療法看護認定看護師の認定が行われ、現在では、数多くのがん看護分野の専門的知識や技術を持った看護師が臨床現場で活躍している。さらに、国の政策としても、2007年4月1日には、「がん対策基本法」が施行され、がん医療に関する研究の推進や、がん医療に関する診療報酬での評価なども整備されてきている。このような要因が、臨床現場におけるがん看護分野の研究活動の発展にも深く影響を与えていると考えられる^{22), 23)}。

終末期看護については、がん患者の終末期だけではなく、クリティカルケア看護分野や循環器看護分野、また老人看護分野など様々な分野で課題として取り組まれるようになってきていることを反映していると考えられた。また、外来看護については、近年、平均在院日数短縮の影響や生活習慣病の増加により、外来受診者は増加傾向にあり、外来看護の業務の範囲が年々拡大している。がんの化学療法や放射線療法を受ける患者への看護、手術を控えている患者に対する手術前の看護などは外来へ移行してきている。糖尿病などの慢性疾患についても、教育入院から外来の継続教育へと移ってきている。このような状況から、今後ますます、外来看護の業務は拡大していくと考えられ、質の高い外来看護実践をいかに提供していくかが今後の大きな課題となることが推測される^{24) ~30)}。

3. 大学の臨床看護研究支援の可能性

「病院所属者のみで行われている発表演題」と「教育研究機関の共同研究者がいる発表演題」の発表演題名を

比較すると、抽出された頻出語やその共起語に違いがみられた。「病院所属者のみで行われている発表演題」では、「検討」「取り組み」「効果」「課題」「支援」などの言葉が上位を占めた。臨床看護師は、日々自分たちの目の前で起こっている現象および実際に行っている看護援助や支援に対してその効果や課題を検討しようとする研究が多いことが示唆された。一方、「教育研究機関の共同研究者がいる発表演題」に関しては、「要因」「支援」「影響」「検討」「体験」などの言葉が上位に抽出された。大学などの教育研究機関が関与すると、臨床で起こっている現象の要因や影響および体験を検証し、論理的かつ現象の中の因果関係を明らかにしながら支援方法を検討しようとしている傾向があることが推測された。

宮芝らは、臨床実践者が看護研究として取り組んでいる活動には、「新知見の探求」、「業務改善など職場の問題解決」「継続教育」が含まれると述べている³¹⁾。今回対象とした演題においても、臨床現場で実際に行った業務改善の取り組みを学会で報告している発表も多かった。臨床実践者が行っている看護研究について、北島らは、Research Questionが明確ではなく本来の研究プロセスを踏まない研究が実施されていることが推測されると述べている³²⁾。また、臨床看護研究の支援体制について、宮芝らは、看護実践者が取り組む研究の指導が病院の看護師を中心に行われているにもかかわらず、指導担当者自身が能力不足という問題に直面しており、大学との共同研究支援等の取り組みが、このような問題解決に有効だと述べている³³⁾。

看護研究は、直接間接に看護実践に影響を与える既存の知を検証および洗練し、また、そのような影響を与える新しい知を創生する科学的なプロセスだと定義されている³⁴⁾。臨床看護研究を看護の質向上のためのエビデンス構築につなげていくには、研究の内容を「業務改善など職場の問題解決」や「継続教育」に留めず、「新知見の探求」をめざした研究にしていく必要がある。そのためには、臨床現場で起こっている現象の関係性を論理的に吟味するような臨床看護研究が実施されることが望まれ、大学が臨床に携わることでそのような研究が増える可能性があるのではないかと考えられた。

V. おわりに

臨床看護師は、数多くの看護研究を行い学会で発表していた。その内容は、患者家族、化学療法患者、新人看護師、手術室看護師、がん看護、終末期看護、外来看護などをテーマにしたものが多く、日々の看護援助の取り組みの報告や直面している課題に対してであることが推察された。また、臨床看護研究に大学が携わることで、臨床現場で起こっている現象の関係性を論理的に明らかにし、エビデンスの構築と看護の質の向上へとつながる研究が増加していく可能性も示唆された。今後は、今回明らかとなった臨床側の研究ニーズを大学側が把握し共通認識を持ちながら、臨床施設と大学が連携した看護研究支援システムの構築に取り組んでいくことが重要であると考えられた。

今回の研究では、テキストマイニングの手法を用いて発表演題名の分析を行った。そのため、研究内容が演題名に反映されていない場合には分析対象にならなかった恐れがある。また、1,000名以上の会員登録があった学会について検討したため、看護分野に偏りがみられたという限界がある。しかし、臨床看護師が、どのようなテーマで多く発表しているかについての概要は把握できたと考える。

本研究は、日本学術振興会科学研究費助成事業（挑戦的萌芽：課題番号：24659959）の助成を受け、その一部として実施したものである。

文 献

- 1) Burns & Grove／黒田裕子，他，監訳．看護研究入門－実施・評価・活用－．東京，エルゼビア・ジャパン，2007，2-16.
- 2) 坂下玲子他．中・大規模病院における看護研究に関する全国調査．日本看護科学学会誌．33(1)，2013，91-97.
- 3) 北島洋子他．学会誌掲載論文から見た臨床看護職が行っている看護研究の現状と課題．兵庫県立大学看護学部・地域ケア開発研究所紀要．19，2012，1-15.
- 4) 坂下玲子他．看護学の発展に寄与する臨床実践者が取り組む研究モデルの創造．平成21-22年度日本学術振興会科学研究費補助金（挑戦的萌芽）研究報告書．2011.
- 5) 前掲書3)
- 6) 前掲書3)
- 7) 井上暢子他．師長・副師長の指導力強化を視野に入れた看護研究支援体制 [1]．看護展望．28(12)，2003，1356-1361.
- 8) 宮芝智子他．兵庫県下の病院における看護研究支援の実態と課題－臨床実践者による看護研究への支援体制の検討－．兵庫県立大学看護学部・地域ケア開発研究所紀要．17，2010，117-129.
- 9) 宇多絵里香．臨床看護研究に関する文献検討．看護研究．45(7)，2012，630-637.
- 10) 服部兼敏．テキストマイニングで広がる看護の世界．京都．ナカニシヤ出版．2010.
- 11) 樋口耕一．KH Coder．（オンライン），入手先<<http://khc.sourceforge.net/>>，（参照2013-10-5）．
- 12) 武田啓子 渡邊順子．女性看護師の腰痛の有無と身体・心理・社会的姿勢に関連する因子とその様相．日本看護研究学会雑誌．35(2)，2012，113-122.
- 13) 前掲書3)
- 14) 前掲書1) 635-665.
- 15) 一般社団法人厚生労働統計協会．国民衛生の動向・厚生指標 増刊．60(9)，2013，44-75.

- 16) 長聡子他. がん患者の家族に関する看護研究の動向と課題. 産業医科大学雑誌. 30(2), 2008, 197-213.
- 17) 織田知穂. 医学中央雑誌からみたクリティカルケア看護領域における家族看護の研究動向と今後の課題. 高知大学看護学会誌. 4(1), 2010, 21-32.
- 18) 野口英子他. 新卒看護師の看護技術習得の実態と指導者・看護師長の期待に関する研究. 日本看護研究学会雑誌. 34(4), 2011, 73-82.
- 19) 厚生労働省. 新人看護職員研修ガイドライン. (オンライン), 入手先<<http://www.mhlw.go.jp/bunya/iryou/oshirase/100210.html>>, (参照2013-10-5).
- 20) 菊池京子. 日本手術看護学会が考える現状と課題. OPE nursing. 26(4), 2011, 494-496.
- 21) 梶原江美. 日本看護学会における手術室看護の研究内容の変遷. 日本看護学会論文集: 成人看護 I. 31, 2001, 288-290.
- 22) 公益社団法人日本看護協会. 資格認定制度 専門看護師・認定看護師・認定看護管理者. (オンライン), 入手先<<http://ninte.nurse.or.jp/nursing/qualification/>>, (参照2013-10-5).
- 23) 厚生労働省. 平成24年度診療報酬改定について. (オンライン), 入手先<http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kenkou_iryuu/iryuuoken/iryuuoken15/index.html>, (参照2013-10-5).
- 24) 赤萩純子他. 成人看護の臨床における研究課題の動向と特徴ー「日本看護学会論文集2010」掲載論文の分析からー. 目白大学健康科学研究. 5, 2012, 41-51.
- 25) 吉田俊子他. 循環器看護分野の研究動向と課題. 看護技術. 52(5), 2006, 473-476.
- 26) 寺岡幸子他. 日本におけるがん放射線療法看護に関する研究の動向と課題. 川崎医療福祉学会誌, 22(1), 2012, 93-102.
- 27) 佐藤正美他. 外来看護に関する研究の動向と課題. 川崎市立看護短期大学紀要. 8(1), 2003, 85-96.
- 28) 山口曜子. 糖尿病患者教育の変遷とその課題. 奈良県立医科大学医学部看護学科紀要. 4, 2008, 1-8.
- 29) 寺島泰子他. 糖尿病患者への外来看護研究の動向と今後の課題. 市立名寄短期大学紀要. 38, 2005, 103-109.
- 30) 前掲書15) 88-260
- 31) 前掲書8)
- 32) 前掲書3)
- 33) 前掲書8)
- 34) 前掲書1) 14
- 35) 日本看護科学学会. 第32回日本看護科学学会学術集会 講演集. 2012.
- 36) 日本看護研究学会. 日本看護研究学会雑誌. 35(3), 2012.
- 37) 日本手術看護学会. 第26回日本手術看護学会年次大会抄録集. 8(2), 2012.
- 38) 日本がん看護学会. 日本がん看護学会誌 第26巻特別号 第26回 日本がん看護学会学術集会講演集. 2012.
- 39) 日本看護学教育学会. 日本看護学教育学会誌 日本看護学教育学会 第22回学術集会講演集. 2012.
- 40) 日本腎不全看護学会. 第15回日本腎不全看護学会学術集会・総会 プログラム・抄録集. 2012.
- 41) 日本救急看護学会. 日本救急看護学会雑誌 第14回日本救急看護学会学術集会プログラム・抄録集. 14(3), 2012.
- 42) 日本糖尿病教育・看護学会. 日本糖尿病教育・看護学会誌 第17回日本糖尿病教育・看護学会 学術集会抄録集. 16, 2012.
- 43) 日本小児看護学会. 日本小児看護学会 第22回学術集会講演集. 2012.
- 44) 日本助産学会. 日本助産学会誌 第2回(第26回)日本助産学会学術集会集録. 25(3), 2012
- 45) 日本創傷・オストミー・失禁管理学会. 日本創傷・オストミー・失禁管理学会誌. 16(2), 2012.
- 46) 日本看護管理学会. 第16回日本看護管理学会年次大会 講演抄録集. 2012.

- 47) 日本看護技術学会. 第11回日本看護技術学会学術集会 講演抄録集. 2012.
- 48) 日本クリティカルケア看護学会. 日本クリティカルケア看護学会誌 第8回日本クリティカルケア看護学会学術集会 プログラム・抄録集. 8(2), 2012.
- 49) 日本家族看護学会. 日本家族看護学会 第19回学術集会 プログラム抄録集. 2012.
- 50) 日本看護診断学会. 第18回日本看護診断学会学術大会 プログラム・抄録集. 17(2), 2012.
- 51) 日本災害看護学会. 日本災害看護学会誌 第14回年次大会講演集. 14(1), 2012.
- 52) 日本循環器看護学会. 第9回日本循環器看護学会学術集会 プログラム・抄録集. 2012.
- 53) 日本老年看護学会. 日本老年看護学会 第17回学術集会抄録集. 2012.
- 54) 日本精神保健看護学会. 日本精神保健看護学会 第22回総会・学術集会 プログラム・抄録集. 2012.
- 55) 平山朝子他. 看護研究支援システムの構築に果たすべき大学の責務. 看護展望. 34(5), 2009, 495-499.
- 56) 樋口耕一. KH Coder2. x リファレンスマニュアル2013. (オンライン), 入手先<http://ftp.jaist.ac.jp/pub/sourceforge/k/kh/khc/Manual/khcoder_manual.pdf>, (参照2013-10-05).

Trend Analysis of Titles of Research Presentations Conducted by Clinical Nurses —Using the Text Mining Method—

YAMAMURA Fumiko¹⁾, MORI Maiko¹⁾, TAO Motomi²⁾, NI Manabu³⁾
INOUE Tomomi¹⁾, UCHINUNO Atsuko¹⁾, SAKASHITA Reiko⁴⁾

Abstract

[Objective]

The objective of the present study is to clarify the subjects in which clinical nurses have interest as the themes for their nursing study, which we believe is the first step for clinical institutes and universities to jointly establish a nursing research support system.

[Methods]

The targets of analysis were academic conference proceedings issued in 2012 by 20 academic associations with 1,000 or more members selected from the membership list of the Japan Association of Nursing Academies, excluding those run by a specific university or hospital and restricted from membership. Titles of presentations of studies conducted by clinical nurses as the main researcher were extracted from the proceedings, and analyzed by text mining using KH Coder.

[Results]

Of the 4,289 targeted titles, the number of those extracted as the titles of presentations of studies conducted by clinical nurses as the main researcher was 1,947 (45.4%), of which 68.5% were the titles of presentations of studies conducted only by clinical nurses. The top three frequently used words identified by the text mining were “patient,” “nurse” and “nursing.” The collocations of “patient” extracted were “receiving,” “family,” “investigation,” “chemotherapy” and “support” ; those of “nurse” extracted were “factor,” “novice,” “influence,” “operation room” and “recognition” ; and those of “nursing” extracted were “patient,” “family,” “end-of-life,” “cancer patient” and “clinic.” Comparison of the frequently used words in the titles of presentations of studies conducted only by clinical nurses and those in the titles of presentations of studies partly conducted by academic researchers revealed that “investigation,” “efforts” and “effects” appeared frequently in the former while “factor,” “support” and “influence” in the latter.

[Discussion]

Many oral presentations of nursing studies had been given by clinical nurses at academic conferences. According to the previous research, however, only few of them had been published as papers. It is assumed that although clinical nurses have been conducting many nursing researches on patients’ families, chemotherapeutic patients, novice nurses, operation room nurses, cancer-patient nursing, end-of-life nursing, and clinical nursing, their researches are mostly on the efforts nurses make in daily nursing support for patients and the problems they face. This suggests the possibility that involvement of academic researchers in clinical nursing studies may lead to establishing evidence and improving the quality of nursing care.

Key words : clinical nurse ; presentation titles ; text mining ; frequently used words ; collocations

1) Basic Clinical Nursing, College of Nursing Art and Science, University of Hyogo

2) Former College of Nursing Art and Science, University of Hyogo

3) Department of Electrical Engineering and Computer Sciences, Graduate School of Engineering, University of Hyogo

4) Nursing Foundation, College of Nursing Art and Science, University of Hyogo